

第1回復興ノウハウ講演会「【語り部育成講座】広報インストラクターに学ぶプレゼンテーションスキルアップ術」開催結果報告

第1回講演会の開催概要

第1回講演会のテーマは、「【語り部育成講座】広報インストラクターに学ぶプレゼンテーションスキルアップ術」で、語り部にとって重要な、相手に響きやすいプレゼンテーションスキルを身につけていただくためのプログラムとした。

講師には、TVディレクター、プロデューサー、報道記者の経歴を持ち、約2,000本の番組制作に携わられてきた阿川真由（あがわ・まゆ）氏をお招きした。阿川氏は広島県在住で、制作・広報の経験を活かして現在はマスコミ対応や広報のコンサルティングを展開されている。被爆者やその関係者らとも交流しておられ、事業に携わる人が自信をもって訴求できる『PR自立』に到達できるよう、情報の受け手の反応を考えたメッセージ発信方法を教えるセミナー等を多数実施されている。

（フライヤー）

第1回 復興ノウハウ講演会

【語り部育成講座】
広報インストラクターに学ぶ
プレゼンテーションスキルアップ術

2025
9/30(火) 14:00▶15:30

配信 会議の内容はオンラインで配信します。お申し込みを
される方には送って配信 URL を送信いたします。
(Zoom によるウェビナー配信を予定)

お申し込み 事前登録制・参加費無料
全国どこからでも、どなたでもご参加いただけます。
下記の HP よりお申し込みください
<https://libertas.co.jp/departments/life-innovation/fukko-meeting/>

お申し込み締切
9/23(金) 17:00

阿川真由氏
cYNDi 代表、
広報 PR コーディネーター
TVディレクター、プロデューサー、
報道記者の経歴を持ち、番組制作約
2,000 本に参画。制作・広報の経験を活
かし現在はプレス対応や広報コンサル
ティングを展開。事業に携わる人が
自信をもって訴求できる『PR 自立』
に到達できるよう、情報の受け手の反応を考
えたメッセージ発信方法を教えるセミナー等
を多数実施。

プログラム

- 14:00 開会挨拶 復興知見班
- 14:05 講演 阿川真由氏
語り部としての話し方、広報視点で聞く「伝える力」、伝えること
の形態・まとめ等
※随時、質疑応答を行います。
- 15:30 閉会

「復興ノウハウ講演会」について ※本年度は6回程度予定しています。

- 本講演会は、被災各地の復興に向けた「教訓・ノウハウ」を、より実効的な形で、より多くの被災地や関係団体等と共有する機会・場となることを目的としています。
- 語り部団体や、東日本大震災被災地で地域課題の解決に取り組む団体が増えた教訓・ノウハウを被災地等を拠点に、全国の皆様にオンライン発信していきます。

第1回 【語り部育成講座】広報インストラクターに学ぶプレゼンテーションスキルアップ術

第2回 【語り部育成講座】震災を被災地で伝える

第3回 自立を目指す地域企業・団体のマネジメント

主催：復興庁
協賛：復興、暮らし、未来の未来
事務局：株式会社リベルタスコンサルティング

※講演会の動画は、後日公開予定です。

■日 時：令和7年9月30日（火）14:00～15:30

■講演者：阿川真由氏（cYNDi 代表、広報 PR コーディネーター、広島在住）

■対象者：被災地の語り部や、地域の伝承活動の実践・発展に取り組んでおられる行政・NPO・ボランティア・住民（個人）など

■参加費：無料

■当日次第：14:00 開会挨拶（復興庁 坂上大介参事官補佐）

14:05 講演（阿川真由氏、質疑応答の時間あり）

15:30 閉会

■実施形態：オンライン開催（Zoom）

講演内容

全体を通じた問題意識：どんな相手にも効果的に伝えるための、語りの“在り方”と“技術”とは何か？

1. 伝えるときの考え方・在り方

- ・「伝える」とは聞き手がいるから成り立つプロセスであり、発信者は相手の立場・理解度に注意を払う必要がある。
- ・相手に優しい（＝易しい）言葉を選ぶ工夫が大切。特に専門用語、地名、人名、建物の名前を説明するときは注意を要する。
- ・広島での被爆者・伝承者の証言から分かることは、スマートさよりも情感ある語り口が伝わる基本であり、写真、遺品、絵、紙芝居などの補助資料とともに伝えることが有効であるということ。

2. 伝える技術

- ・「過去・現在・未来」からなるストーリー作りを意識する。時間軸が揃うことで聞き手の理解と共感が深まる。
- ・広島では、被爆の証言内容をベースに、朗読会、劇、ミュージカル、映画など多様な形態で伝承が展開されてきた。
- ・伝える技術は災害体験の伝承だけでなく、日常のプレゼンやPRでも活用できる。

伝えるときの考え方・在り方 ②易しい工夫



広島での事例

- 被爆体験者・伝承者の証言活動
スマートよりも情感
写真、遺品、絵、紙芝居 ほか補助資料
- その人らしい話は伝わりやすい
鉄道ファン、不安なことや困っていること
ワークショップで祖父の話

©eYNDi

15



質疑応答

① 話し方・伝え方全般について

Q：「聞き手の立場」とは、相手がどういう話を聴きたがっているかを知ることでしょうか。

A：相手がどういう人であるかを知ることが大切。例えば、相手が小学生であれば教師を通じて様子や、どういうことを知りたがっているかを伺っておくとよい。また、相手が集団の場合はどういうコミュニティなのか（スポーツクラブのメンバー、ご近所の仲間、など）を把握しておくとしやすい。話の内容を変えるのではなく、コミュニティの性格に合わせて話し方を少し工夫するだけでかなり伝わり方が変わってくる。

Q：話したりプレゼンをしたりするときに、視覚的に有効なものがあれば知りたいです。

A：広島市では、長年の経験上、講話を行うときはパワーポイントなどの資料を作成してそれを使うことを推奨しているとのことである。紙や画面で視覚的に確認できるものがあると、話が耳に入りやすくなり、理解も進みやすい。

Q：伝える、伝わることの難しさに日々直面しています。特に、関心のない人に振り向いてもらうにはどうすればよいでしょうか。

A：①相手（聴き手）に合わせた伝え方をすること、②そこに“自分”というものを入れて話す、の2点を意識していただきたい。当事者（被災者）である語り部の方に「相手に合わせて話せ」と言うのは失礼に当たると考える方もいらっしゃると思うが、本質的な大切なことはより多くの人達に伝承することなので、そのためには聴き手に合わせるものが効果的であることも確かである。

Q：“自分ができる範囲で話す”ということを前提としたときに、話し方のスキルアップという点で、何か有効な取組はありますか。

A：スキルアップを目指すことは大切だが、同時に、過度に“上手に話そう”と思わないことも大事。語り部の場合、よどみなくスマートな話し方よりも、とつとつと情感を込めた話し方の方がよく伝わるという声を伺うことがよくある。自分が話したいことを、話せる分量で、気持ちを込めて話すことをまず心掛けていただきたい。

② 語り部関係

Q：語り部として大事なことは何かを知りたいです。

A：まずは“ご自身が無理をしないこと”が大事だと考える。「何かしなければ」という思いをお持ちのことと推察するが、自分が健康で余裕を持った状態でないと、良い形で続けることが難しくなってしまう。伝えるという行為は自分を大事にすることから始め

ていただきたい。

Q：他の被災者から聴いた話と自分の体験とを上手くミックスするにはどうすればよいですか。

A：自身の経験と他者の経験の共通部分を見つけて、そこをベースとして話の内容を組み立てるとよい。災害が起きたとき、まさに同じ時間においてお互いが何をやっていたか、どういう状況だったかという点や、たまたま同じ場所にいて同じ状況に身を置いていたといった共通点があれば、関連づけて語ることがやり易くなる。

Q：外国人に語りかけるときは、英訳した資料や、語り部の話を同時通訳してくれる人がいれば大丈夫でしょうか？

A：通訳の方が語りの内容についてどこまでよくご存じかによって、伝わり方が大きく左右される可能性が高い。講話内容には、それ特有の語句や表現、背景などがある。通訳の方がそれらを共有・理解することで、語り部の方が伝えたいことを的確に翻訳してくれる確度が高まる。

Q：語り部活動を継続することは簡単ではないと思いますが、アドバイスはありますか。

A：心理療法の観点を踏まえると、つらい経験をされた方が、自身で話したいことを、可能な分量だけ話すことができるという状況を作ることがポイント。また、話を聴く側にも聴きたい内容や分量があるはずなので、それらと上手くマッチするように工夫するとよい。それを行った上で、少しずつ何度かに分けて話すのか、1回で全てを語り切るのかを判断するとよい。いずれにせよ、語り部と聴き手の間に無理が生じないようにしていただきたい。

Q：つらい体験をした方から話を聴く際、あるいはその体験を他者に伝える際に、被災者の心理的な負担を抑えつつ、なおかつ体験の凄惨さをオブラートに包まずに表現するのは難しいと感じます。アドバイスはありますか。

A：最初の質問への回答と関わるが、まずは被災者も聴き手も、自身が負担を感じないようにすることが大事。その上で、無理をせずに何ができるか、何を話せるかを考えていただきたい。無理をすると気持ちもたえず活動も続かない。大切なことは伝承がずっと続いていくことであるから、できる範囲でやるということを意識していただきたい。

Q：語り部の講話の時間の長さは、1回当たりどれくらいが適当でしょうか。

A：絶対的な基準はないと思うが、広島市の場合は「講話 45 分、質疑応答 15 分」と、1回につき 60 分というのがよくあるパターンのようなのである。脳科学の分野などでも人間が集中できるのは 45 分くらいとされている。他方で、20～25 分くらいの短めの時間で

区切るのが適当という考え方もある。

Q：災害の当事者ではない人が、“他の人（被災者）はこう言っています”という伝え方だけでは不十分ではないかと感じています。当事者以外の人から当事者以外の人へ話るとき、聴き手に伝えるために工夫すべきことは何ですか。

A：先ほど「自身の経験と他者の経験の共通部分を見つけて、そこをベースとして話の内容を組み立てるとよい」と“自分”というものをに入れて話す」というアドバイスをしましたが、当事者以外から当事者以外へというケースにおいては、まさにこれらの点を意識していただきたい。当事者から体験を聴いて自分はどう思ったか、そしてそれを自分から他者に話そうと思ったのはなぜなのか、こうしたことを話すだけで、相手への伝わり方はかなり違ってくるはずなので、ぜひ実践していただきたい。

③ プレスリリース関係

Q：プレスリリースは誰でもできるものなのですか。

A：誰でもできる。例えば語り部の会の企画などをリリース用資料にまとめて、記者クラブやメディアに持ち込むことは、やろうと思えば誰でも可能。ただし、それが採用（報道）されるかどうかは、プレス側の判断に委ねられる。

Q：当団体の語り部活動の認知度を高めるため、地元の記者クラブ等へのプレスリリースを活用したいと考えています。ただ、リリース用資料の作り方がよく分かりません。たくさん書きすぎたりメリハリのない文章になりがちです。アドバイスをお願いします。

A：講演の中で、私が作成した「伝承のためのテンプレート」という資料をご紹介したが、プレスリリースのためのテンプレートもある。後日、そのプレスリリース用テンプレートも皆さんと共有できるようにしたい。

当日資料

- ・ 講演資料
- ・ 講演者作成の「伝承のためのテンプレート」
- ・ 講演者作成の「プレスリリースのためのテンプレート」

お問い合わせ先

復興ノウハウ講演会開催事務局（株式会社リベルタス・コンサルティング）

Mail: fukko-meeting@libertas.co.jp

Tel: 03-3511-2161

（以上）

